

一月前に協力会のコンペで一緒にプレーしたゴルフ場の若い支配人の訃報が届いた。新型インフルエンザによる高熱が下がらず突然に命を失ってしまったとのことである。葬儀が行われたのは冬晴れの日で、私はその帰り途中の犬吠岬に寄り道をした。

百八十度以上が海で水平線が丸みをおびている。広大な空は夕暮れの赤い色を刻々と増しながら無限の広がりを示していた。頑強そうだった四十一歳の支配人も、幾度となく夕暮れのゴルフ場でこんな美しい空を見上げながら自然の美しさに驚嘆していたことだろうと、あまりにもはかない人の命と大自然を対比していた。

二千五百年前、仏教を開祖した釈迦は人の悟りに仏となる道がある事を見出した。人間は自然の一部分でしかなく、人間が自然をコントロールするなどと言う事は永遠に出来ない。弟子たちに説いている。一方、西欧から始まったとされる現代科学技術文明はコントロールをメイン・テーマとした。管理はつねに「進歩と発展」の蓄積の上に君臨する神の如きものと錯覚されている。そして、西欧合理主義と呼ばれる文明の申し子たるコンピュータ・システムはいつも何々管理システムと命名されてきた。だが、人々は最近、その手の管理に限界がある事を感じ始めている。

哲学者高山岩男は及川古志郎生誕百年記念誌の中で、釈迦が悟りの境地を端的に解説になったお経、華嚴経の解説をしながら、次のように述べている。

「私は縁あって大東亜戦争中、先生が海軍大学の校長をせられていた時代に、先生の兵理学を構築せられる所をお聞きし、その研究や建設に二、三の学者とともに協力を求められました。この事業は戦局日に日に苛烈となり、帝都を初め大都市のほとんどが爆撃を受け敗戦となるに及び、ひとりでに中断し、ついに建設を見ずに終わりました。…私は何回かの研究会の席上で先生が言葉少なに漏らされるその思想の中に、実に哲学的な思索、それも本格的、玄人的な哲学的思索を感じとって、いたく驚嘆すると同時に、この人が初めから学者になっていたならどんな大学者になっていただろうと、ひそかに畏敬の念を禁じ得ないことがしばしばあったのであります」と。

海軍兵学校の図書館で及川校長が刻銘に読んでいた大正新編大蔵経は初めてお経が活字で印刷されたもので、南方熊楠は和歌山中学時代に二千冊、七千巻の大蔵経を読破し摘録していた。幼少の頃より漢文をそらんじていた南方熊楠や及川古志郎にとつて大蔵経はわれわれが夢中になって読む推理小説のようなものだったかも知れない。大英博物館で世界の宗教を独学し、二十七歳のときに土宜法竜とロンドンで出会った熊楠は郷里の熊野に戻り、高野山管長の土宜に世界の宗教を教示するようになる。

南方熊楠と及川古志郎の二人は、お経のなかに無明煩惱もなく清澄そのもの世界がある事が知っていた。自あつて他、他あつて自で、ばらばらでは全く意味がなく、自他は不可分一体のもの、日常生活や経済活動においても、自利利他は全く同じこと「自利利他双方をなするを菩薩行とする」という仏教の教えを基に、混乱する敗戦後の社会を立ち直らせようと、及川古志郎は日本甲子会を指導しようと考えていた。

精神集中を高めるヨガを基にした中村天風の天風会や、戦術的な教えである儒教を基にした安岡正篤の師友会などがもてはやされ、エコロジーな仏教を基にした教えは当時では物足りない概念であつたのかも知れない。しかし、最近の企業行動の基準が顧客指向、消費者指向に向い、倫理法人会や経営品質協議会などの活動する姿を見ると、日本人も六十年経つてやっと先生の考えに追いつくことが出来ましたと及川大将に報告できるようになったと思つている。

私は十数年前に南紀白浜で南方曼陀羅を見たことがある。

それは南方が宇宙の森羅万象相関関係図をモデリングしたものである。その曼陀羅が、その頃コンピュータソフトの世界でオブジェクト指向の分析や設計を表す方式として新しく作られたUMLに、酷似していると見るのは無理なにごじつけだろうか。

UMLとは日本語では「統一モデリング言語」と訳され、それまでのフローチャートでは表現できなかったオブジェクトの因果関係を表すために作られた。現実の事象をオブジェクト図で整理し、そこから相関関係を導き出したものがクラス図となる。これは設計者がシステムの利用者や開発者と情報処理方式を共有するために作成する。

そもそも三十年前に全くの素人であつた私がソフト会社を経営するようになった頃、データは六十四バイトとか百二十八バイトとかのメンバーのようなものだった。それがデータベースと言われる大きな表になり、今は、多次元データベースのキューブに進化してきている。単細胞からかなり大きなかたまりの物に進化したとは言え、まだ、南方熊楠が研究していた粘菌や珊瑚のような状態であると思われる。

このキューブ形のデータを使い、個にたどり着くドリルダウンや病院でCTスキャンをするようにスライシングをしたり、局面を変えて見るダイシングなどが行えるようになり、コントロールが主目的だったソフトウェアの世界にも、データを比較分類し、継続的比較法によるデータに内在する多様性を見出す、熊楠の研究方法そのものが行えるようになってきた。それらの手法は最新BI(ビジネスインテリジェンス)として既に商品化されている。記憶素子の進化発展がコンピュータを物理学の世界から生物学の世界へと導いている。コントロールを超えてどこまで進んでゆくのかは、大蔵経に記されているのではないかと思つている。